テスカトリポカ城

Tezcatlipoca Castle

草谷 十織
Kusatani Tori

草と岩ばかりが続く山あいの道を進みながら、私は少しばかり焦っていた。太陽はとうに稜線の向こうへと沈み、夕焼けに燃えていた空はすでに色彩を失いつつある。それに伴い、ただでさえ低かった地上の気温も急速に下がっていく。
一刻も早く、今夜の宿へと辿り着かなくてはならない。
背中に負った器材の重みを一歩一歩踏みしめるごとに感じながら、またひとつ峠を越える。そこでやっと、私は山のふもとにひっそりと立つ一軒家を見つけた。私の芯まで冷えきったからだが安堵のため息をつく。木造の質素な佇まいではあるが、これが私の友人のひとりが暮らす家、今回の測量の拠点として借りることになっている宿だ。
疲れと寒さに震える足をなんとか運び、私はその家の前までたどり着いた。古びたドアの前に申し訳程度にぶら下がっている鎖を引いて呼び鈴を鳴らす。すると十秒を待たずして、友人のテポストリがドアを開けて迎え入れてくれた。
「やあ。久しいね、ヨワリ。遅いからずいぶん心配したよ」
「すまない。ふもとの馬車を出してもらうまでに少し手間取ってしまってね。また今回もよろしく頼む」
そうして、私たちは抱擁の挨拶を交わす。数年ぶりに再会した友人の肩は、心なしか以前より細くなっているような気がした。
「さあ、寒かっただろうに。中でゆっくり食べて飲んで、暖をとってくれよ。こうしてまた会ったんだ、今夜は積もる話をしようじゃないか」
「ああ、そうしたいところだが……」私は首をすくめた。「さっそく明日は早朝から出るつもりでね。すまないが食事を終えたらすぐ休ませてもらうよ」
「明日……？　相変わらず気が早いな。俺の勘では、明日の天気はあまりよくなさそうなんだがね」
テポストリは空を仰いで言った。確かに、この山岳地帯で生まれ育っている彼の勘は、十分信頼に足るところではある。
「うむ。だが、どちらにせよ出るかどうかの判断はしなくちゃならない。厳しい条件だからこそ一日も無駄にできないからね。気持ちだけありがたく受け取っておくよ」
「そうか。……いや、こちらこそ疲れてるところを悪かった。まあとにかく入りな。案内するよ」
そう言って、テポストリは廊下を歩いていく。私は頷くと、背中の荷物がドアや壁にひっかからないように注意しながらその後を追った。測量の器材は大きくて重いうえにかなり繊細なので、扱いには細心の注意を払わなければならない。
「おお、そういえば」ドアをひとつ通り過ぎたころ、テポストリは思い出したように言った。「今日はもうひとりお客さんがいてね。旅の楽師をやってるっていう娘さんなんだが、彼女もここに着いてすぐに部屋に入って休んじまったよ。やはり平地のもんには、この山はちとこたえるものなのかね」
「いや、私は仕事柄山に慣れてはいるが……」私は思わず眉をひそめた。「楽師だって？　それが、何の用があってここに」

「何かね、俺も詳しくは知らないんだが、どうやら前の噴火に巻き込まれた時に村の者に世話になったらしい。で、発った後もしばらく彼と便りを交わしていたんだが、突然連絡が絶えたことを心配してまたここまで来たんだと。だが、残念ながら彼は伝染病でね、数ヶ月前に……」
「……そうか」
　恩人の死。旅を生業とする者にはよくある話だ。かく言う私も、数年前にテポストリが住むこの谷の近くの火山が噴火したと知った時は肝を冷やしたものだっ た。何しろ、国中に火山灰が飛散するようなひどい有さまだったので、付近の住民はもはや無事ではあるまいと思ったのだ。幸いにもこの周辺は溶岩の被害は受けなかったようで、死者も山の反対側の村に比べるとかなり少数で済んだ、と聞き及んでいる。――しかし、疫病の類はそんな場所といえどもその手をゆるめることはないらしい。
「さあ。お前の部屋はこっちだよ、ヨワリ」
　私はしばらくその楽師の娘が眠っているらしい部屋のドアを眺めていたが、やがてテポストリに導かれるままにそこを離れた。

◊

　かん、かん、とテポストリが薪を割る音で私は目覚めた。起き上がってすぐに枕元の気圧計を確認したが、明らかに昨夜測った時より低い。言うまでもなく下り坂の天気だ。窓の外の空も重く灰色に垂れこめ、夜が明けた後にも関わらず陽の光はほとんど閉ざされていた。
　私は登山用の装備を一旦片づけると、普段着に着替えて一階に下りた。玄関に行く途中で例の楽師の部屋が開いていることに気づいたが、中には誰もいなかった。そのまま外に出て、家の表で淡々と薪割りの作業に励むテポストリに「おはよう」と声をかける。
「おはよう」彼は斧を薪に差したまま顔を上げた。「どうだ？　俺の勘も間違っちゃいなかっただろ」
「まったくだな。例の楽師はどうした？」
「お、気になるのか？　村の方に歌いにいったよ。変わってるがなかなかの美人だぜ。口説きにでも行くか？」
「そういうのじゃない。私は楽師という人種自体、あまりよく知らないんだ」
「本当か？」
「本当だ。それに、ちょうど村の様子も見ていきたいと思っていたところだしな。行ってくるよ」
　テポストリがからかってくるのを軽く流しながら、私は村の方へと足を向けた。
　暗い中で、石につまずいて転ばないように気をつけながら道にそって歩く。ひとが住んでいるとはいえかなり高度のあるこの場所では木がほとんどなく、溶岩の混じった石と両脇の山から流れ込んでくる小さな川、そしてその間を埋めるようにして生えている高山植物がわずかに色をそえている。そんな景色を目に入れつつ数分ほど谷を下っていくと、やがて家が十数軒集

まっている村に着いた。
　遠目に見ているうちは、以前訪れた時とさほど変化はないように思った。しかし、村の中に入ってみると、いくつかの家が跡形もなくなっていることに気づいた。おそらくは噴火による災害の影響で、住人が亡くなるなりどこかへ移住するなりしてしまったのだろう。ぽっかりと開いたその土地に残された家の土台だけが、壊されてしまったかつての生活の残滓を物語っていた。否応なく感傷にひたされながら、私は少し物寂しくなった村を歩く。
　すると、村の中央広場に近づいていくにつれて、朝の静寂を破って響く奇妙な音が耳に入った。私は、最初は川か風の音だと思った。まるで空気に溶けこむようにして、とぎれては続いた。

　あまたの世界をさすらう楽師　このトゥーラの歌をお聞き
　これは昼のない世界のお話　黒き鏡の城のお話

　それはつい足を止めて耳を傾けたくなってしまうような、歌だった。言葉はどこの地方のものなのか、かなり独特の訛り方をしていたが、何とか聞き取ることができる。見れば、中央広場に積み上げられたケルンの横に腰かけた白い髪の少女が、リュートをつまびきながら傍らの子どもたちに語り聞かせていた。彼女が、 例の楽師で間違いないだろう。
　私は少し離れたところにある手ごろな岩に腰かけた。そして、地面に座りこんで彼女をみつめる無垢な子どもたちと同じほど真剣に耳を澄ませながら、穏やかな旋律に乗せられる物語を聞くことにした。

　とある国の山奥深く　魚一匹住まぬ火口湖
　その死火山の中心に　黒曜石で築かれた巨大な城があった
　名はない　なぜなら民びとの誰ひとりとして　外の世界を知らぬから
　そこは昼がなく　夜が続く　永遠に　それが世界のあり方だと信じていた
　さて　彼らはいかようにして　そこで光をえていたか？
　ひとつ　城の壁に密生する発光花　わずかな養分で民の顔を照らす
　ふたつ　その種からとる貴重な油　火を灯せばたちまち　位高き者の全身を映す
　みっつ　空と湖に輝く星　無数の光で優しく城を包む
　そしてよっつ　これはいちばん大事なこと
　遥か空に鏡うつしのように
　あざやかに光をはなつもうひとつの城　天の城
　それは　何もかもが同じ姿　上下逆さまになっている以外は　まるで本物と区別がつかない
　はたしてそこには何がすむのか　神か　それとも　同じように鏡うつしになった民びとか？
　そもそもどちらが虚像なのか　はたまた　どちらも幻　神の業か？
　数々の賢者が　それぞれに仮説を立てた　しかし証明できたものはいなかった
　上空には強風が吹く　これ以上城を高くしようものなら　すぐ崩れてしまう

だから天の城は神の領域　決してひとがおかしてはならないもの　それは絶対の掟だった
そして　神が民に課す　試練はひとつだけではない
破壊と豊穣を同時にもたらす神風が　決まった周期で城を襲った
ひとをも空中にさらう暴風　発光花はすべて散り　また新たな実を結ぶ
この風をおさめる方法はひとつ　人柱を神に捧げること
選ばれるのは　物心もつかぬ幼子
まだ神の手のうちにある子どもなら　怒りをかわぬだろうと
神聖な最上階から　天の城へと送り出す
そして決まってかえってくる　神にさらわれることなく　かえってきた幼子は
成長すれば城の王として奉られるのだ　その周期を治めるもの　ひとつの象徴として
そうやって民は生き延びてきたのだ　何代も　何代も
さて　これはその長い歴史の中の　ある一周期のお話
今年もまた神風が来る　贄の子どもを選ばねばという時
生まれたばかりの子どもがひとりもいなかった
このところ死産続きだったのだ　王と城の賢者たちは悩んだ
このままでは次の周期に移ることができない　そこで彼らは思いつく
そうだ　幼子でなくとも　白痴のものならよいのではないか
そうして選ばれたのが　生まれてから一度も　言葉を発さぬ少女
彼女に親はいなかった　疎まれ捨てられた末に
前周期の王　いまは老いて地位を落とした男に　育てられていた
男は嘆いた　この子は白痴などではない　私の夢語りを聞く耳がある
そう　私が贄となった時の話さ　風に連れ去られ　天の城に近づいた時に
もうひとりの私が近づいてくるのをみた　私は思わずその鏡に触れた
そして私たちは入れ替わったのだ　地の私は天に　天の私は地に
いまとなっては夢とも現ともつかぬ　くだらない話だろう
ああ　実際に誰も信じてはくれなかったさ　けれどあの子は耳を傾けてくれた
澄んだ瞳で頷いてみせた……　あれは理解しているとしか思えぬ
風に捧げでもしてみろ　あの子はたちまち神の言葉を解し　怒りを買うことだろう
だからどうか奪わないでくれ　彼女は妻と娘を失った私の　唯一の希望なのだ
そう喚いて神を冒涜しようとする男を　賢者たちは狂人扱いし
有無を言わさず少女を連れ去った　男が暮らす部屋の遥か上にある　宮殿に
そして儀式が始まる　侍女たちが少女のからだを清め　絢爛な神事の服を着せる
化粧をほどこす　その間　少女はうつろな目をして　されるがままにしている
やがて　その時が来る　最上階に続く王の間で
少女は城でたったひとつの鏡に映ることを許される　神の化身ともいうべき黒曜石の鏡に
もう後戻りはできない　少女は王の手にひかれるまま　風吹きすさぶ空へ階段をのぼる……
その時だった　少女の耳に　風にのってとぎれとぎれに　かすかな歌が届いた

　神よ　聞き届けたまえ
　無限の合わせ鏡に閉じ込められた
　あわれな民の歌を　聞き届けたまえ
　空に映し出される　白銀にけぶる湖
　光を纏う黒き城　永遠の星
　地は天に　天は地に
　神よ　夢みているのはあなたなのか
　それとも　わたしがあなたを夢みているのか

それは　男が少女に毎日聞かせていた歌だった　少女の目に光がともる
しかし　時はおそく　少女のからだはもうすでに浮き始めていた
王と賢者たちが見守る前で　少女は生まれて初めての　最初で最後の声を発する

　カミヨ　キキトドケタマエ……

その後はもう一瞬のことで　少女は突風にさらわれ　影も形もなくなった
ただ　どこからともなく聞こえてくる歌だけが
静まった空に　残響のようにひいてはかえし　ひいてはかえしていたという

「はい。これでこのお話は、おしまい」
「ええ？　続きはないの？」
「だって、誰も知らないもの。その後お城はどうなったのかも、女の子がどこへ行ってしまったのかも。歌が伝えられているのはここまでなの。だから、これでおしまい」
「じゃあ、もうひとつお話、して！」
「また明日ね。みんなこれから朝ごはんを食べて、お勉強しなくちゃいけないでしょ？　今朝はこれまでにして、早くお家へお戻り」
　そう言って楽師の娘が――トゥーラが優しく微笑むと、やっと子どもたちは立ち上がってそれぞれの家へと帰っていった。私はその様子を見届けると、折をみて彼女のもとへ歩いていき、そっと声をかけた。
「とてもすばらしい歌を、聞かせてもらいました」
「あら、あなたは……？」
　トゥーラはリュートを片手に持つと、いぶかしげな様子で私を見上げた。
「あなたと同じ宿に泊めさせてもらっている、ヨワリという者です。テポストリとは昔からの友人です」
「ヨワリさん、ね」一瞬のうちに表情がほどける。「わたしはトゥーラ。ごらんの通り、旅の吟遊詩人よ。お聞きいただいてとてもうれしいわ。あなたの言葉はとてもきれいだけど、どち

らからいらしたの？」
「ああ、私は一応都の地理院に属していますが専ら測量の仕事で。おそらくはあなたと変わらない、国中を旅してまわる身です。……実のところを言いますと私も妻、それに娘と別れたひとり身で、恥ずかしながらあなたの歌に登場した男につい共感してしまいましたよ。魂のこもったあなたの歌だからこそ、余計にね」
「そう。それはよかった……」
　そう呟く彼女の瞳が、心なしか曇ったように見えたので、私は思わず動揺した。
「すみません。何か、お気に障ることでも……？」
「いえ、そう言ってわたしの歌をほめてくださった方が以前にもいらして、それで……」
「もしかして」私はふと思い当たって言った。「この村の、亡くなられたという……？」
「まあ、もうご存知なのね。……そう、彼の魂のためになればと思って、私はさっきの歌をうたったの。彼がいなかったらいまのわたしはないというくらい、噴火で大変な時に本当によく面倒をみてもらったから……。わたし自身の気休めでしか、ないとは思うけれど」
「そんなことはない。あなたの声はきっと彼に届いていますよ」
「本当？」
「本当です。きっと」
「そう、ね」トゥーラは、目に涙をためながらふっと笑った。
「あなたの言葉なら、何だか信じられるような気がするわ」

◊

　測量を開始してから二日目、私は早くもこの地帯で最後の測量を終えようとしていた。普通、高山の測量は天候条件も厳しい上に、測点の設置のために何度も険しい山を上り下りしなくてはならず、かなりの体力を要する。ゆえに今回のような小規模な測量かつ近くに拠点を構えられる場合であっても、余裕を持って二週間ほどの日程を組んでおくのが通例だった。しかしつい先日に天候が回復してからというもの、トランシットを覗けば必ずスタッフがくっきりと観測できるほどの、雲ひとつない快晴ぶりが続いた。そんな都合のいい状況に恐怖すら覚えながら順調に作業をこなしていくうちに、私は何とたった五日の滞在で最終日を迎えることになったのだった。
「百十四度、と」
　私は何度も念入りに確認しながら、手元のノートに最後の数値を書きこんだ。これを持ち帰って計算すれば位置も高さもすべて浮き上がり、あとは報告するのみとなる。私は張りつめていた肩の力を抜き、ふうとため息をついた。ここに設置していた器材を撤去し、残りのスタッフの回収に向かう。日の高さからみて、まだ午後二時から三時といったところだろう。このままうまく下山できれば、今夜はテポストリと祝杯をあげられる。大荷物を負って岩をよじ登るからだも、軽くなろうというものだ。
　私は不安定な岩場をなんなく乗り越え、山の尾根の上に出た。風が強いので、先ほど以上に

気を引き締めて歩く。
　と、急に風がその激しさを増し、私はやむなく足を止めた。想定外の気候の変化などよくあることだが、私は少し焦りを覚えた。常に吹きつけるのではない、予測のつかない妙な突風だったからだ。私は遠くでごうごう鳴っている風の音を聞きながら、安定するまでその場にじっとしていることにした。
　トゥーラの歌に出てきた、「神風」でなければよいのだが……。
　そんな考えが、私の中に自然と浮かんできた。くだらない、と思った。現実には人間を浮かせるほどの風など吹かない。あれはおとぎ話なのだ。彼女の歌の中にしか存在しない、架空の――

　　神よ　聞き届けたまえ

　一瞬にして全身が総毛立った。……いま、何が聞こえた？　きっと私の想像にちがいない、そうであってほしい。そうだ、風のうなり声がそう聞こえたと錯覚させただけだ。この場所に、歌をうたうトゥーラなどいるはずがないのだから。

　　無限の合わせ鏡に閉じ込められた
　　あわれな民の歌を

「聞き届け、たま、え……？」
　私はもはや完全に混乱していた。尾根に絶え間なく吹きつけ始めた風の中で、音を聞き分けようと必死に耳を澄ませていた。岩の上を這ってのぼり、谷に向かって直立する。

　　空に映し出される　白銀にけぶる湖
　　光を纏う黒き城　永遠の星
　　地は天に　天は地に

　その時うたっていたのがトゥーラなのか、私なのか、はたまた物語の中の男なのか――もはやわからなかった。すべては風の音に包まれていた。私が岩の上で足をすべらせて空中に身を投げ出す音すら、轟音のうちにかき消えた。

　　神よ　夢みているのはあなたなのか
　　それとも　わたしがあなたを夢みているのか

♦

　寒さに耐えかねて目を覚ました。何かひどい悪夢をみていたような気がする。

ふと見ると、服が冷や汗でぐっしょりと濡れている。私は寝台から降りてそのみすぼらしい服をはいだ。着替えるだけで我慢しようとも思ったが、どうもからだの芯にまとわりつく悪寒を拭うことができない。そこでとうとう、皿の上に置いてあった最後の発光花の種を石で潰し、本能のままに火をつけてしまった。

途端に、部屋の隅々までを照らし出す小さな光源が、力強く熱を発して私のからだを癒す。不快感が消え、わたしはほっとして窓辺まで歩いていった。そのまま椅子に腰かけて外に顔を出し、いつまでも変わらない景色をみて心を落ち着ける。

発光花の白い光と黒曜石の城壁の対比に、星を映し出す湖。そして、空を仰げばそれらすべてが精緻に映し出されたもうひとつの城。若いころよりずいぶんと低い位置からの眺めになってしまったが、遠くなった分、憧れとともにうつくしさもその輝きを増しているように思えた。胸がちりちりと焼かれるような衝動に駆られ、言葉と音が私の中で躍り出す。

そう、一時期は私もこの頂で栄華を極めていたものだが、いまでは何の価値があったかもわからない。語る相手がいないのなら神の近くにいようと意味はない。どうせひとりでいるのならこうして窓辺に座って遥か遠くを眺め、歌を考えている方がよほど性に合っているのではないか、とすら思える。

突然、ドアをノックする音が響く。久方ぶりの来客だ。振り向いて席を立つと、ドアの向こうから男の声が聞こえてくる。

「ヨワリ、俺だ。テポストリだ。例の彼女を連れてきたよ」

そうだ、私は養子を取ることになっていたのだった。言葉が出ないだけで忌み嫌われているという、年ごろの娘。私は何よりも言葉を必要としている彼女の助けになりたかった。身を捧げてもいいと思った。妻と娘を幸せにできなかった私の、身勝手な贖罪ではあるかもしれないが——

「ああ、入ってくれ」

私がそう告げるとともにドアが開き、テポストリに手をひかれた少女が現れる。その白い髪は少し乱れ、小さく結んだ口は幼い印象を強く外見に示していた。

「紹介しよう。こちらが君の父親になるヨワリ」

ああ、このうつろな目の少女に、少しでも言葉が届くといい。私は微笑んで彼女に手を差し出す。

「そしてヨワリ、こちらが君の娘になるトゥーラだ」

やがていつか、神のもとに私の歌が響くことを願って。

テスカトリポカ城

http://p.booklog.jp/book/51826

著者 : 草谷 十織
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/torilune/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/51826

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/51826

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ